



鶴の笛 (16)

たったこの間までは、みんなたべものをかくしあって、自分たちのことばかり考えていた鶴たちは、よるとさわるとたべもののけんかで、なかではおたがいにだましたり、きずつけあったりして、血なまぐさいことばかりで、鶴たちは、食べものの事といっしょに精神的な心配で、今日はたのしいという日は一日だってありませんでした。



鶴の笛 (17)

みんな、がやがやと群をなして、弱いものをおびやかしては、少しのたべものもとりあげて強いものがいばっているのです。

鶴の子供たちも、自然に気持がすさんで、おとなの悪いところばかりまねるようになって、きたない言葉づかいで、けんかばかりしていたのです。あんまりききんがつづいたので、みんな村をすてて



鶴の笛 (18)

行ってしまいましたけれど、いまはかえって、以前より平和になり、七羽の鶴は、どんなことがあっても、のぞみをすてないで、ここで元気に働いて暮らしましょうと話しました。

鶴のお嫁さんの案内で、魚のたくさんあるところを見つけましたので、七羽の鶴はしっそな気持で、いつもたのしい食事をするのが



鶴の笛 (19)

出来ました。

ある夜、あんまり美しいお月夜で、金色の光が、こうこうとあたりをてらしていていますので、足の悪い鶴は、また笛を吹きました。

三羽の子供の鶴はお月様へむかって、歌をうたいたくなりました。「きれいなきれいなお月さまア。」

小さい鶴が歌いました。すると中の兄さんの鶴が、「生れた村が



鶴の笛 (20)

いちばんいい。」と歌いました。
上の兄さんは、「きもちのいい夜
だね。何を考えてもたのしいね。」
と歌いました。

子供鶴のお母さんのはのんびりと
して、
「ほんとに、わたしたちはしあわ
せになったのね。

つづく

